

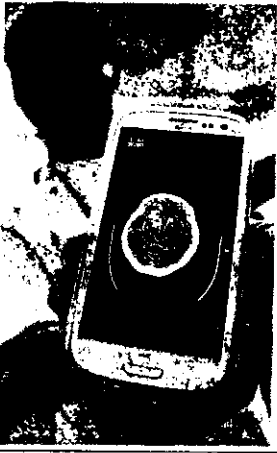
# 海部病院導入 スマホ遠隔診断 迅速治療で成果

## 69件活用 医師不足の補完期待

徳島県立海部病院(牟岐町中村)がスマートフォン(スマホ)を使った遠隔画像診断システムを9月に導入し、効果を挙げている。専門医の不在時に脳卒中患者が搬送されてきた場合など、これまでには69件で活用され、迅速な治療効果が期待された。医師の働きを生かしている都道府県の過疎地の医療格差を埋める役割としても期待が高まっている。(牟岐支局・十井良典)



システムは、脳や心疾患など、急症に一刻を争う救命現場で専門医が不在の場合の対応を想定して開発され、県内では徳島大牟岐院が01年4月から運用を始めた。スマートフォンとつながり、



スマホで受信した遠隔画像診断のモニター画面。牟岐町中村の県立海部病院

スマホに送られる脳や心臓の画像を、専門医がパソコンで確認し、診断結果をスマホに送信する。専門医はいつでも適切な処置を判断できる。

システムの強みをひき出すのが、医師数の少ない海部病院だった。過疎地の病院では、最初の導入で約8000円かけてシステムを構築。海部の頭文字をとって「スマホ」と名付けた。

スマホは18名の専用スマホを、海部病院の医師と徳大病院、県立中央病院の専門医に配備している。海部病院の医師が専門外の診断で外部の意見を必要とする際、海部病院の専門医に送られる。これまでスマホを導入した69件の約の割合が治療の一刻を争

う脳神経疾患だった。導入の目的、当直体制に入った海部病院に80代の女性が脳卒中で救急搬送されてきた。病院に専門医はいない。当直医がスマホでMRI画像を徳大病院の専門医に伝送すると、専門医が素早く対応。発症後3時間以内なら症状を大きく改善できる薬を投与でき、まひなどの後遺症を防ぐことができた。

海部病院は従来も徳大

病院の医師に電話で症状を伝え、助言を仰ぐ支援を受けてきた。だが、この時の当直医は「スマホ」を使わなければ治療の可否判断が難しかった。海部病院は常勤医が10人に満たず、夜間や休日

の当直は主に1人体制となる。ある若手医師は「専門外の緊急を日中に行っている状況。スマホは医師の不安を軽減を緩和してくれて、心強い」と話す。

県内は都道府県の医師偏在が悩んだ。10年の県内医師数2500人に対し、海部は41人。脳神

経外科医は、海部病院の「寄付講座」に徳大病院から人が派遣されているが週5日に限られている。Kサボートの導入を進めた徳島大の影沼照寛特任教授は「過疎地に専門医を送って医療サービスを拡充するのが同等の効果がある」と、医師偏在を補完する役目を担うと強調する。若手医師の教育にもつながり、とくに経験や知識が積みつらいと敬遠されがちな地方の病院に、若い研修医を呼び込む契機になるとの期待も寄せる。

Kサボートの導入を進めた徳島大の影沼照寛特任教授は「過疎地に専門医を送って医療サービスを拡充するのが同等の効果がある」と、医師偏在を補完する役目を担うと強調する。若手医師の教育にもつながり、とくに経験や知識が積みつらいと敬遠されがちな地方の病院に、若い研修医を呼び込む契機になるとの期待も寄せる。

Kサボートだが、協力を指導医は徳大のKサボートを紹介して治療がうまくいかなかった場合の責任の所在も文化まわっていない。こうした点のルール作りが、今後の課題として残っている。Kサボートのスマホは9月から徳島防衛組合にも配備され、救急隊員や医師の緊急連絡を図る試みも始まった。影沼特任教授は「あといかにうまく機能すれば、新たな地域医療支援体制のモデル事例になる」と話している。